室蘭工業大学
学術資源アーカイブ
Muroran Institute of Technology Academic Resources Archive

複合語のアクセントと意味・修飾構造：ノルウェー語Sandnes方言を通じて見た諸問題

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 室蘭工業大学 公開日: 2017-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): Sandnes Norwegian, Compound Stress, Modification Structure, Stress-Modifier Rule 作成者: 三村, 竜之 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10258/00009167

室工大紀要第 66 号（2016）129～138

学　術　論　文

複合語のアクセントと意味・修飾構造

―ノルウェー語 Sandnes 方言を通じて見た諸問題―

三村 竜之*1

On the Correlation between Compound Accent and the Internal Modification Structure

-Issues Raised by the Study on Sandnes Norwegian-

Tatsuyuki MIMURA

（原稿受付日　平成 28 年 6 月 27 日　　論文受理日　平成 29 年 2 月 10 日）

Abstract

This paper aims at reexamining the mechanism operative behind the compound stress patterns found in Sandnes Norwegian, a southwestern dialect of Norwegian and proposing a new and better explanation for the phenomena. Although the Compound Stress Rule which the author has proposed so far may explain almost all the compound stress patterns of the dialect, there are still several exceptional cases which have to be explained semantically. To seek for an alternative theory, the author points out the compound stress has a strong tendency to fall on the modifier, not the head of a compound, and based on the findings, the author proposes a new and better rule which provides a thorough explanation for both the regular and irregular or exceptional patterns.

Keywords: Sandnes Norwegian, Compound Stress, Modification Structure, Stress-Modifier Rule

1　序

1. 1　本研究の背景と目的

ノルウェー語 Sandnes（サンネス）方言（以下、Sandnes 方言とする）は音韻論的に有意義なストレス（強勢）を有する言語で、語には主強勢を担う音節が必ず一つ存在する。これまで筆者は、Sandnes 方言の複合語アクセントに関する私見を公にし、複合語における主強勢の位置に関する規則を導いた (拙論[(1)(2)])。

しかしながら、その後の「アルファベット関連語彙」（後述）を中心とする調査を通じて、複合語強勢

*1 室蘭工業大学　ひと文化系領域

に関する拙案の反例となる資料が得られた。これらの例外的な複合語強勢は、筆者が既にデンマーク語に関してとってきたように、例外的な事例に関して幾つかの「意味関係」を抽出し、個々の「意味関係」に関して個別的にアクセント規則を設定することで処理することが可能ではある。しかしながら、意味特徴に基づくこれまでの拙案では例外的な事例の説明が可能ではあるものの、それらの間の関係性に目が向けられず、その結果、（自明のことではあるが）規則的な事例と例外的な事例との間の関係に関しても模索されることが無かった。

そこで本研究では、これまで拙案で主張してきた意味的な視点とは異なる新たな視点からも考察することで、例外的な事例のみならず、規則的な事例にも通ずる特徴を導き出し、より簡便に、かつ全ての複合語に関して主強勢の位置を導きうる統一的な規則の構築を試みる。さらに、規則の背景にあるメカニズムや原理に関して考察を行い、今後本研究が発展すべき道筋を示す。

1. 2　ノルウェー語 Sandnes 方言について

Sandnes 方言の話される Sandnes はノルウェー南西部に位置する Rogaland 県の一都市である。2012 年 6 月の統計では約 6 万 8 千人の人口を有しており、2013 年にはノルウェーで 7 番目に大きな都市になると見込まれている（典拠: http://www.sandnes.kommune.no）。

首都 Oslo の方言に代表されるノルウェー南東部の方言を基盤とする標準方言 bokmål と比較すると、Sandnes 方言は分節音の点では様々な相違点*2 を示すものの、韻律的な側面においてはそれほど大きな特徴は示さず、アクセント型の具現形（音調型）の違い(3)や「前気音 preaspiration」(4)の存在が指摘できる程度である。

なお、既に一連の拙論(2)(3)で度々述べてきたように、Sandnes 方言の音声学及び音韻論に関する先行研究は全体的には乏しい。分節音に関しては Oftedal(5)などの記述研究や Dommelen(6)などの実験音声学的研究などが散見される一方で、アクセントに関する研究報告や調査資料は極めて少なく、管見に及ぶ範囲では筆者の一連の論考を除いてはほとんどなく、音声面での類似性の高い近隣の方言である Stavanger 方言を扱ったもの（例えば Selmer(7)や Vanvik(8)など）が辛うじて参照可能であるに過ぎない。

Sandnes 方言の音韻並びに韻律的特徴を概略すると以下のとおり:

(1) a. 語中における主強勢の位置が音韻論的に有意義である、いわゆるストレス（強弱、強勢）アクセント言語。

b. 主強勢の現れる音節には、主として「高平調 high-level tone」が現れる場合と（ゲルマン語学の慣例では「アクセント 1」と呼ぶ）と「下降調 falling tone」の現れる場合とがあり、音韻論的に有意義な音調を有する*3

c. 音節構造は、基本的には英語などその他のゲルマン諸語に類する構造を有し、音節頭子音 onset と音節末子音 coda のいずれの位置にも子音連結が現れうるが、音節末子音の位置に「二重子音 geminate」が現れうる点が特徴的である（この点は、いわゆる「北ゲルマン語（ノルド諸語）」（但し、デンマーク語は除く）に広く観察される特徴である）。

d. 母音は（少なくとも具体音声のレベルでは）「量 quantity」の点で対立するが、例えば、強勢を担う音節に関しては長母音と二重子音 geminate が共起しないなど、母音量と音節末子音連結の構造との間に共起制限が存在する。

---

*2 例えば、bokmål において舌尖の「はじき音 flap」（あるいは「ふるえ音 trill」）として現れる r の音は、Sandnes 方言では（デンマーク語標準方言と同じく）「有声口蓋垂摩擦音」として現れる。また、これに関連して、bokmål において特徴的な「反舌音 retroflex」は Sandnes 方言には観察されず、既に述べた「有声口蓋垂摩擦音」と歯茎音の組み合わせとして現れる点も特徴的である。

*3 これまで一連の拙論において主張してきたが、筆者は、Sandnes 方言を「ストレスアクセント」と「ピッチ（高さ、高低）アクセント」が「併存」する言語や、ストレスアクセントとピッチアクセントの「中間的」なアクセントを有する言語である（たとえばスウェーデン語に関する城生 (2008: 134)(9) の見解を参照）とは全く考えてはおらず、飽くまでもストレスアクセントの言語であると捉えている（拙論(2)(4) を参照されたい）。

1. 3　アルファベット関連語彙

これまで筆者は、Sandnes 方言や系統的に近い関係にあるデンマーク語における「アルファベット頭文字語 initialism」の音韻論的側面について私見を述べてきたが(1)(10)(11)、拙論において筆者は、アルファベット頭文字語を「AIDS のようないわゆる acronym ではなく、IBM のようにアルファベット読みをする略語」と定義してきた。

しかしながらその後、例えば日本語の「ビタミン C」の「C」のように厳密には「略語」ではないものと、用語の上での区別をする必要が生じてきた。そこで筆者は、中井(12)や上野(13)に倣い、いわゆる「略語」である「アルファベット頭文字語」と「ビタミン C」の「C」のような略語でないもの（さらにはこれらを構成要素とする複合語や派生語も）を包括する用語として、「アルファベット関連語彙」という用語を導入することとした。

2　複合語強勢規則とその例外

2. 1　複合語強勢規則

Sandnes 方言では、複合語における主強勢の位置は以下に述べる規則で導くことができる:

(2) **複合語強勢規則**

複合語の品詞や構成要素の数、内部構造の別（「右枝分かれ構造」か「左枝分かれ構造」の別）を問わず*4、(直接構成素に分析した際に得られる)「前部要素」([A [BC]] という内部構造であれば A が、[[AB] C] という内部構造であれば AB がこれに相当）が本来有する主強勢が複合語全体の主強勢として現れる。

上記の規則を、以下、便宜的に CSR (Compound Stress Rule) と呼ぶことにする。

CSR の具体例*5 を以下に示す*6:

---

*4 複合語における主強勢の位置を問題とする限りにおいては品詞の別や内部構造の別は関与しないが、複合語全体の音調（アクセント 1 と 2）の別に関しては後部要素の品詞や前部要素の音節数が条件として関与することがある。従って、構成要素の品詞や内部構造の別は複合語のアクセント型全体を決定する上では重要な条件である（詳細は拙論(10)を参照されたい)。

*5 本稿において引用する資料は、全て筆者が Sandnes 方言を母語とする話者一名をインフォーマントとして、2009 年から 2012 年にかけて実施した聞き取り調査を通じて採取したものである（詳細に関しては拙論(4)を参照されたい)。インフォーマントは Brede Tingvik Haave さん（1988 年生・男性)。数年に渡りインフォーマントとして筆者に尽力して下さった Tingvik Haave さんにこの場をお借りして心よりお礼を申し上げる。

*6 本稿では、引用する資料は、まずイタリック体のラテンアルファベットでその綴りを示し、続いて音声記号を用いてその音声を提示する。ただし、Sandnes 方言は正書法が確立しておらず、従って、本稿では便宜的に bokmål（ノルウェー南東部の方言を基盤とする標準方言）の正書法で表記する。

本稿で用いる音声記号は基本的に国際音声記号 (IPA) に準拠しているが、煩雑になるのを防ぐために可能な限り簡略表記を用いている。但し、以下の二点において IPA の正用法に従っていないため注意されたい。第一に、音調の表記には tone letter は用いず、F（下降調)、H（高平調)、L（低平調)、M（中平調）の記号を用いた。母音や子音といった単音を表記する音声記号に比べて tone letter はそれほど一般的では無い点に加え、音声表記が煩雑になるのを防ぐためである。また、音声表記から速やかに Acc1 と Acc2 の別を判読できるよう、音声表記に最初に上付きのアラビア数字を付した。第二に、強勢の表記には、IPA で一般的に用いられている補助記号は用いず[á]や[à]の記号を用いた（便宜上、[a]で母音を示す)。こちらも、音調を示すアラビア数字との混同を回避し、判読のしやすさを重視した結果である。

なお、F や H といった記号は、飽くまでも各音節の音調を、音韻論的な解釈を経た上で大まかに三段階に分けて捉えた、いわば簡略的な表記に過ぎない。従って、声調のように、それぞれの記号が固有の音調を示している訳ではなく、また、仮に同じ記号で表記された音節であっても、具体音声としては厳密には高さが異なる可能性も十分にある点に注意されたい。

(3) a. 品詞の別（二要素からなる複合語から）

(i) 複合名詞

A: *gǻ́gàte* [^{1}gɔ́ː.gàː.da HML]「歩行者天国」

(< *gǻ́* [^{1}gɔ́ː H]「行く」+ *gáte* [^{2}gáː.da FL]「通り」)

B: *sjokoládekàke* [^{2}ʃo.ko.láː.də.kàː.gɑ MMFL]「チョコレートケーキ」

(< *sjokoláde* [^{2}ʃo.ko.láː.də MMFL]「チョコレート」+ *káke* [^{2}káː.ga FL]「ケーキ」)

(ii) 複合動詞

A: *réngjø̀re* [^{2}ʁɑ́ɪ̯n.jø̀ʁʁ FL]「掃除する」

(< *rén* [^{1}ʁɑ́ɪ̯n H]「清潔な」+ *gjǿre* [^{1}jǿʁʁ H]「–をする」)

B: *nédskrìve* [^{1}néːʁ̥.sk͡ʁ̥ìː.ʋa HML]「書き留める」

(< *néd* [^{1}néːʁ̥ H](*sic*)「下へ」+ *skríve* [^{2}sk͡ʁ̥íː.ʋa FL](*sic*)「書く」)

(iii) 複合形容詞

A: *gúlbrùn* [^{2}gʉ́ːl.b͡ʁʉ̀ː.nə FML]「黄味がかった茶色の」

(*gúl* [^{1}gʉ́ːl̥ H]「黄色」+ *brún* [^{1}b͡ʁʉ́ː.nə H](*sic*)「茶色い」)

B: *gúllgùl* [^{2}gʉ́ll.gʉ̀ː.lə FML]「琥珀色がかった黄色の」

(< *gúll* [^{1}gʉ́ll H]「黄金」+ *gùl* [^{1}gʉ́ː.lə FL](*sic*)「黄色い」)

b. 内部構造の別（三要素からなる複合語から）

(i) A: *plásticvìnglâss* [^{1}pl̥ás.tik.ʋìːn.glâss HMML]「プラスチック製のワイングラス」

(< *plátic* [^{1}pl̥ás.tik HL]「プラスチック」+ *vínglàss* [^{2}ʋíːn.glàss FL]「ワイングラス」

cf. *vínglàss* < *vín* [^{1}ʋíːn H]「ワイン」+ *gláss* [^{1}gláss H]「コップ、グラス」)

B: *atómkràftvêrk* [^{1}a.tʰóːm.k͡ʁ̥ɑ̀ft.ʋæ̂ʁ̥k MHML]「原子力発電所」

(< *atóm*「原子」+ *kráftvèrk* [^{1}k͡ʁ̥ɑ́ft.ʋæ̀ʁ̥k HL]「発電所」)

cf. *kráftverk* < *kráft* [^{1}k͡ʁ̥ɑ́ft H]「力」+ *vérk* [^{1}ʋǽʁ̥k H]「工場」

(ii) A: *rødvinsglass* [^{1}ʁœ́ː.ə.ʋins.glàss HMML]「赤ワイン用のグラス」

(< *rødvin* [^{1}ʁœ́ː.ə.ʋìː'n HML]「赤ワイン」-*s* (結合要素) + *gláss*

cf. *rǿdvìn* < *rǿd* [^{1}ʁœ́ː.ə HL]「赤い」+ *vín* [^{1}ʋíːn H]「ワイン」

B: *atómvå̂penhàndel* [^{1}a.tʰóːm.ʋɔ̂ː.pən.hɑ̀n.dəl̥ MHMMLL]「核兵器の売買」

(< *atómvå̀pen* [^{1}a.tʰóːm.ʋɔ̀ː.pən MHML]「核兵器」+ *hándel* [^{1}hɑ́n.dəl̥ HL]「商取引」)

cf. *atómvå̀pen* < *atóm* [^{1}a.tʰóːm MH]「原子」+ *vǻpen* [^{1}ʋɔ́ː.pən HL]「武器」

上記の CSR は、本研究で「アルファベット関連語彙」と呼ぶ語を構成要素とする複合語に関しても適用される:

(4) a. 前部要素がアルファベット関連語彙

(i) *Á-vitamìn* [^{1}áː.ʋi.ta.mìːn HML]「ビタミン A」

(< *Á* [^{1}áː H] + *vitamín* [^{1}ʋi.ta.míːn MMH]「ビタミン」)

(ii) *ÍD-nùmmer* [^{2}íː.de.nòm.mɔʁ̥ FMML]「ID ナンバー」

(< *ÍD* [^{2}íː.de FL]「身分証明」+ *númmer* [^{1}nóm.mɔʁ̥ HL]「番号」)

(iii) *HIV́-infektiòn* [^{1}hɔ.i.ʋéː.in.fek.ʃòːn MMHMML]「HIV 感染」

(*HIV́* [^{1}hɔ.i.ʋéː MMH]「ヒト免疫不全ウイルス」+ *infeksjón* [^{1}in.fek.ʃóːn MMH]「感染」)

b. 後部要素がアルファベット関連語彙

(i) *skárre-r̀* [^{2}skɑ́ʁ.ʁə.æ̀ːʁ̥ FML]「喉の奥（口蓋垂）で発音する R」

(< *skárre* [^{2}skɑ́ʁ.ʁɑ FL](*sic*)「ガラガラと音を出す」 + *ŕ* [^{1}ǽːʁ̥ H]「アルファベットの R」)

(ii) *vínter-ÒL* [^{1}ʊín.tɔʁ.ò:.el HMML]「冬期オリンピック」
(< *vínter* [^{1}ʊín.tɔʁ HL]「冬」+ *OL* [^{2}ó:.el FL]「オリンピック」)
(iii) *kjérne-DNÀ* [^{2}ʃǽʁ.nə.de.en.à: FMMML]「核 DNA」
(< *kjérne* ^{2}[ʃǽʁ.nə FL]「核」+ *DNÁ* [^{1}de.en.á: MMH]「DNA」)

2. 2　複合語強勢規則の例外とその解釈案

前節で概略を述べた複合語強勢規則(CSR)に反する例外的な強勢の型として、次の二種類が確認されている: 1) 前部要素と後部要素のいずれにも主強勢の現れる型、2) 後部要素にのみ主強勢の現れる型。以下、それぞれの型について具体例を挙げながら考察していくことにする。

2. 2. 1　前部・後部要素のいずれにも主強勢の現れる型

複合語を構成する前部要素と後部要素のそれぞれに主強勢の現れる型は、従来、サンスクリット文法に倣い dvandva と呼ばれてきた、各構成要素が意味的に「並列的」な関係にある複合語に見られる。具体例*7 を以下に示す:

(5) a. *dánsk-nórsk* [dánsk.nɔ́ʒ̥sk HH]「デンマーク（語/人）とノルウェー（語/人）の」
(< *dánsk* [^{1}dánsk H]「デンマーク（語/人）の」+ *nórsk* [^{1}nɔ́ʒ̥sk H]「ノルウェー（語/人）の」)
b. *dánsk-nórsk-svénsk* [dánsk.nɔ́ʒ̥sk.sʊénsk HHH]「スカンジナビア三国間の」
(< *dánsk* + *nórsk* + *svénsk* [^{1}sʊénsk H]「スウェーデン（語/人）の」)
c. *svárt-hvítt* [sʊáʁ̥t.kʊ̯íʰtt HH]「モノクロ」
(< *svart* [^{1}sʊáʁ̥t H]「黒」+ *hvitt* [^{1}kʊ̯íʰtt H]「白」)
d. *marxísme-leninísme* [maʁ̥k.sís.mə.le.ni.nís.mə MHLMMHL]「マルクス・レーニン主義」
(< *marxisme* [^{1}maʁ̥k.sís.mə MHL]「マルクス主義」+ *leninisme* [^{1}le.ni.nís.mə MMHL])

なお、いかなる音声的特徴をもって前部要素と後部要素のいずれにも主強勢が現れていると判断するかに関しては、各要素の全体的な音調が手掛かりとなる。Dvandva は（少なくとも）アクセントの上では一単位をなしていないと考えることができるが、仮に一単位を成し、従って後部要素が副次強勢を担う場合は、例えば*(*marxíSme*)-*leninìsme* [-MMML]のように語末にかけて漸次的な音調の下降が期待される。しかしながら、実際は-*leninísme* [-MMHL]のように強勢を担う音節で音調が高くなる。このような音調は、既に(5)において示したように、後部要素が本来有している音調であり、ここから dvandva における後部要素の強勢を主強勢と判断することが可能となる。

2. 2. 2　後部要素にのみ主強勢の現れる型

既に(4)で概観したように、アルファベット関連語彙を構成要素とする複合語も CSR に従い前部要素本来の主強勢が複合語全体の主強勢を担うが、後部要素がアルファベット関連語彙の場合に限り、以下に示すように、例外的に後部要素にのみ主強勢の現れる場合がある:

(6) a. *lag B́* [^{1}la(:)g.bé: MH]「B チーム」
(< *lág* [^{1}lá:g H]「チーム」+ *B́* [^{1}bé: H]「アルファベットの B」)
b. *type Á* [^{1}ty(:).pə.á: MMH]「A タイプ、A 型」
(< *týpe* [^{2}tʰý:.ə FL]「タイプ、型」+ *Á* [^{1}á: H]「アルファベットの A」)

---

*7 Dvandva の語例は、現在確認されている限りでは、ここに示した 4 例のみであるが、例えば *ja/nei-spørsmål*「Yes か No かのいずれかの答えしかない質問」や *øre-nese-halslege*「耳鼻咽喉科医」などのように、dvandva を構成要素とすると考えられる複合語の例は多数確認されている。しかし、これらの複合語における dvandva に類する要素は形態素としての自立性が低く、単独で用いることはない。

c. *blyant H́B* [^{2}bly(ː).ant.hɔ́ː.bə MMFL]「HB 鉛筆」
(< *blýant* [^{1}blýː.ant HL]「鉛筆」+ *H́B* [^{2}hɔ́ː.be(ː) FL]「HB（芯の固さ; Hard and Black）」

2. 2. 3　意味関係による説明

前節、前々節において CSR の反例となる複合語の具体例をそれぞれ示したが、これらはそれぞれ前部要素と後部要素の間の「意味関係」からまとめることが可能であると筆者は考える。まず第 2.2.1 節において概観した「前部要素と後部要素のいずれにも主強勢の現れるタイプ」であるが、これは既に触れたようにいずれも「並列複合語（dvandva）」であり、従って、前部要素と後部要素の間に「並列」という意味関係が成り立つ場合としてまとめることが可能である。

続いて第 2.2.2 節において概観した「後部要素にのみ主強勢の現れるタイプ」であるが、このような強勢の型は（複合語の定義をやや拡大することとなるが）後部要素に数詞を含むものや、飲食店やホテルなどの施設名、役職などの肩書きや呼称伴う人名などにも観察される:

(7) a. (i) *A4́* [^{2}a.fíːʁɑ MFL]「A4（紙のサイズ）」
(< *Á* [^{1}áː H]「A 列（紙のサイズの系統）」+ *4́* [^{2}fíː.ʁɑ FL]「4」)
(ii) *avsnitt 5́* [^{1}a(ː)ʋ.snit(t).fémm MMH]「第 5 章」
(< *avsnitt* [^{2}áːʋ.snìʰtt FL]「章」+ *5* (*fém*) [^{1}fémm H])
(iii) *gruppe 4́* [^{2}g͡ʁʉp.pə.fíː.ʁɑ MMFL]「第 4 グループ」
(< *grúppe* [^{2}g͡ʁʉ́ʰp.pɑ FL](*sic*)「グループ」+ *4* (*fíra*) [^{2}fíː.ʁɑ FL]「4」)
(iv) *nummer Í4* [^{2}nom.mɔʁ̥.fjóʁ̥.tn̩ MMHL]「14 番」
(< *númmer* [^{1}nóm.mɔʁ̥ HL]「番号」+ *14* (*fjórten*) [^{2}fjóʁ̥.tn̩ HL]「14」)
b. (i) *Hotell Svérre* [^{2}hɔ.tʰel.sʋéʁ.ʁə MMFL]「Hotel Sverre【Sandnes に実在するホテル】
(< *hotéll* [^{1}hɔ.tʰéll MH]「ホテル」+ *Svérre* [^{2}sʋéʁ.ʁə FL]【人名】)
(ii) *Pizza Kvadtrát* [^{1}pit.t͡sa.kʋ̥a.d͡ʁɑ́ːʰt MMMMH]【Sandnes に実在するピザ屋】
(< *pízza* [^{1}pʰíʰt.t͡sa HL]「ピザ」+ *Kvadrát* [^{1}kʋ̥a.d͡ʁɑ́ːʰt MH]【Sandnes 最大のショッピングモール】)
c. (i) *Kong Hárald* [^{1}kɔŋ.hɑ́ː.ʁɑl MFL]【現ノルウェー国王】
(< *kong* [^{1}kʰɔ́ŋŋ H]【王に対する敬称】+ *Harald* [^{2}hɑ́ː.ʁɑl FL]【人名】)
(ii) *Harald Blắtann*「ハラルド歯青王」
(< *Harald* + *Blåtann* [^{2}blɔ́ː.tʰànn FL]【称号】
(cf. *blắ* [^{1}blɔ́ː.ə](*sic*)「青い」, *tánn* [^{1}tʰɔ́nn H](*sic*)「歯」)
(iii) *løytnant Jénsen* [^{1}lœnt.nant.jén.sn̩ MMHL]「Jensen 中尉」
(< *lǿytnant* [^{2}lœ́ɪ̯nt.nant FL] (*sic*)「中尉」+ *Jensen* [^{1}jén.sn̩ HL]【人名】)
(iv) *Rørlegger Tórgorsen* [^{1}ʁœ(ː)ʁ.leg.gɔʁ̥.tʰɔ́ʁ.gɔʁ.sn̩ MMMHML]【Sandnes にある配管業者】
(< *rørlegger* [^{1}ʁœ́ːʁ.lèg.gɔʁ̥ HML]「配管工」+ *Torgorsen* [^{1}tʰɔ́ʁ.gɔʁ.sn̩ HML]【人名】)

筆者は、デンマーク語に観察される類例に関して、「後部要素が前部要素の「種別」や「類別」を表わす」という意味関係を提案し、例外的な強勢の型の説明を試みた(14)が、Sandnes 方言の事例に関しても同様の意味関係から説明することが可能であると考える。

例えば、(7a.i)の *A4* では、用紙の大きさを表わす「A」という範疇の内の「どの」サイズであるのかを後部要素である数詞「4」が特定している。また、例えば(7b.i)の *Hotell Sverre* は、あくまでもそれが指し示すものは「ホテル」であるが、数ある内の「どの」ホテルであるかを後部要素である *Sverre* が詳しく規定しており、「種別・類別」という意味関係を読み取ることができる。

同様に、(7c.i)の *Kong Harald* は、あくまでもそれが指し示しているものは前部要素が表わす「王」であるが、「どの」王であるかを後部要素である固有名詞 *Harald* が詳しく規定しており「種別・類別」と

いう意味関係が読み取れる。また、(7c.ii)の *Harald Blåtann* は前部要素が *Harald* という人名で、後部要素 *Blåtann* はその個人的特徴を指し示しているが、*Blåtann* が「どの」*Harald* であるかを特定しているという点で、同じく前部要素と後部要素の間に「種別・類別」の意味関係が読み取れる。

3　複合語内部の意味関係と音韻論的共通性

3. 1　修飾部強勢付与規則

前節までの考察から、Sandnes 方言における複合語の強勢の型は、1)複合語強勢規則(CSR)と 2)前部要素と後部要素の間の「意味関係」の二つの点から全て説明が可能であることが明らかとなった。従って、これ以上の議論や考察は、Sandnes 方言の複合語強勢に関しては不要であるように思われるが、一方では CSR の反例とされる事例が「意味関係」から説明されながら、他方で CSR に適合する事例にはそのような意味的な考察がなされておらず、両者の間の関係性が依然として不明瞭である。また「意味関係」から説明される例外的な事例も「並列」と「種別・類別」という形で個別的に説明にとどまっており、これらの事例の間に何らかの関係性が存在しないか検討を加えることが求められよう。

そこで改めて、CSR の反例となる「後部要素にのみ主強勢の現れるタイプ」の構成要素間の「修飾関係」に着目してみると、(6)に示したアルファベット関連語彙を含む複合語や(7)に示した施設名などは、全て後部要素が前部要素を詳しく規定しており、従って「主要部・修飾部」(Head-Modifier)という修飾関係を有していることが読み取れる。これに対し、(3)や(4)に示した CSR に従って強勢の型が導かれる複合語は、全て「修飾部・主要部」という修飾関係を有している。

ここで注目すべきは、修飾関係の点で異なる二つのグループの複合語は、いずれも主強勢が現れている要素は「修飾部」であるという点である。ここから、CSR の適用という点では異質であった二つのグループの複合語は、実は主強勢の付与される要素という点では共通していたということが明らかとなるのである。

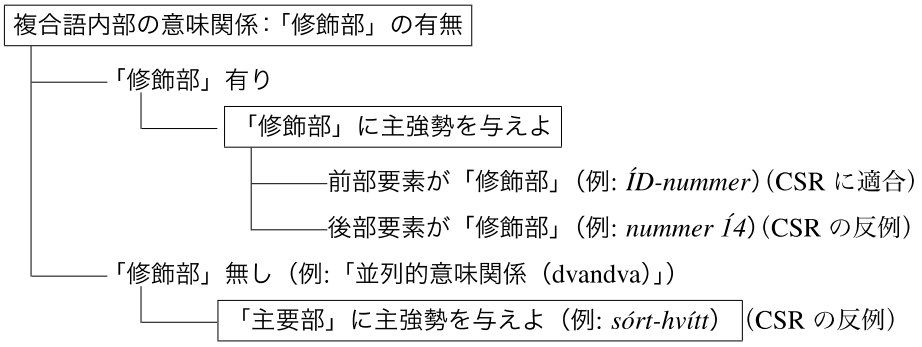
この事実を捉えるべく、筆者は新たに「修飾部強勢付与規則」(Stress-Modifier Rule; SMR)という規則を提案する。複合語の主強勢は修飾部を担う要素に付与すればよい、という規則である。

3. 2　SMR の修正: dvandva の事例

ここで、新たに提案した SMR に関して一つの疑問が生ずる: 果たして SMR は dvandva にはどのように適用されるのであろうか。というのも、dvandva は前部要素と後部要素が意味関係の上では対等であるからである。Dvandva の構成要素間には「主要部」や「修飾部」といった従属的な意味関係が存在せず、敢えて言うならば、いずれの要素も「主要部」として機能していると言えよう。そこで、筆者は SMR を次のように修正する: **複合語に「修飾部」が存在しない場合は「主要部」に主強勢を付与せよ。** このような一種の「修正規則」が必要となるものの、SMR を導入することで「修飾部が存在するか否か」という一つの基準に基づいて簡潔に主強勢を付与することが可能となり、また、これまでの CSR による説明では個別的であった規則的な事例と不規則な事例の間の関係性が明らかとなる。

前節ならびに前々節において提案した SMR の適用過程は以下のように図示される:

(8) SMR の適用過程（CSR との比較）



4　結語

4.1　まとめ

以上、Sandnes 方言の複合語強勢に関して、これまで拙論で提案してきた「複合語強勢規則（CSR）」に代わる新たな規則として「修飾部強勢付与規則（SMR）」を提案した。これまでの CSR では、音韻規則とその例外を説明する為の「意味関係」という、いわば音韻論と意味論の二本立てであったが、SMR では「修飾部の有無」という単一の基準による簡潔な説明が可能となり、CSR では不明瞭であった規則的な事例と不規則な事例との間の関係性も明らかとなり、Sandnes 方言の複合語強勢の全体像を捉えるという意味においては、SMR の方が優れていると言えよう。

4.2　残された課題

4.2.1　例外の存在とその解釈

本研究で提案した SMR により、Sandnes 方言の複合語強勢は全て説明が可能であるが、SMR では説明のできない語例が確認されている:

(9)　*peppermýnte* [ˀpe(p).pɔʁ.mýn.tə MMFL]「ペパーミント」
　　cf. *pepper* [ˀpʰéʰp.pɔʁ̥ FL]「胡椒」
　　mynte [ˀmýn.tə FL]「ミント」)

Peppermynte はおそらく *pepper* と *mynte* から作られた複合語であると考えられ、意味的に考えて「修飾部・主要部」の修飾関係を有すると想定される。それにも拘わらず、主強勢は主要部である後部要素 *-mynte* に現れており、SMR では説明ができない（言うまでもなく、CSR の反例でもある）。

なお、系統的に近い関係にあるデンマーク語においても、*peppermynte* に相当する *pebermýnte* は後部要素と思われる *-mynte* に主強勢が現れており、同じく複合語強勢の例外的な事例である。

現時点では推察の域を脱し得ないが、おそらく語源的にはドイツ語の *Pfeffermínze* の借入に由来するもので、ドイツ語のアクセントをそのまま保存しているのではないかと考えられる。しかしながら、なぜこの語が借入された時期のアクセントを保存しているのかについては未だ不明である。

さらに、*pepper* を前部要素とする *pépperbørsa*「胡椒入れ」（cf. *børsa*「容器」）や *pépperkake*「スパイス入りクッキー（クリスマスのお菓子）」（cf. *kake*「ケーキ」）は前部要素に主強勢が現れているため、後部要素 *mynte* に例外的な強勢の型を生み出す要因が隠されている可能性があるが、後部要素が *mynte* である複合語は（筆者の資料では）*peppermýnte* 以外には未だ確認されておらず、そのため比較しうる語例が存在しない。今後の調査が待たれる（ちなみに Sandnes 方言と系統的に近しいアイスランド語では SMR（並びに CSR）に順ずる型を示す: *píparmynta*; なお、主強勢は前部要素が担うが、ここでのアクセント記号はアイスランド語の正書法によるものである点に注意されたい）。

4.2.2　なぜ「主要部」ではなく「修飾部」か

複合語の主要部ではなく修飾部に複合語全体のアクセントが置かれる（換言すれば、主要部本来のアクセントは複合語形成の際に消失、あるいは弱化する）という現象は、ノルド諸語を含むゲルマン諸語は言うに及ばず、系統的に異なる様々な言語においても指摘されている。例えば、Duanmu (1990: 143-144)[15]は中国語（普通話）を例に挙げ、主要部でない構成要素にアクセントの置かれる型を NHS（non-head stress）と呼んでいる。

様々な言語においてこのようなアクセントの型が指摘される一方で、なぜ主要部ではなく修飾部にアクセントが置かれるかに関する考察は著しく乏しく、管見に及ぶ範囲では窪薗(2001)[16]のみである。そこで筆者は、窪薗[16]から着想を得て、「主要部」や「修飾部」の概念や複合語構成要素間の関係の再検討を提案したい。

従来「主要部」と呼ばれてきた構成要素は、複合語全体の形態統語論的な属性を規定する上でのみ「主」であって、複合語全体の意味情報を捉える上ではむしろ「修飾部」の方が「主」であると考えられる。

というのも、複合語全体の意味を捉える上では、修飾部の方がむしろ情報量が大きいからである。例えば、p.4 にて引用した *gulbrun*「黄味がかった茶色の」は *gul*「黄色」の一種ではなく *brun*「茶色」の一種であり、従って、複合語 *gulbrun* 全体の意味の根幹を占めるという点では、確かに後部要素-*brun* は主要な働きをしている。しかしながら、言うまでもなく、*gulbrun* と *brun* とは具体的な指示対象が同一ではない。この指示対象の差異は修飾部である *gul*-によって生じており、この意味では、むしろ修飾部である *gul*-の方が重要な情報を有している。この修飾部が有する情報量の点での重要度が韻律的側面にも反映されており、その結果、複合語全体のアクセントを修飾部が担っているとは考えられないだろうか。

尤も、窪薗[16]が既に指摘していることではあるが、この解釈が真に妥当であるかを検証するためには修飾部の重要度を裏付ける現象が求められる。例えば、窪薗[16]は「複合語短縮」を取り上げ、(「修飾部+主要部」という構造を有する）複合語を短縮した場合に後部要素が消去される傾向が強い事実と後部要素のアクセントが消失ないし弱化する点を関連付けて論証を試みている (pp. 121-124)。

確かに、窪薗[16]が引用する日本語 (p. 121) では複合語の短縮は生産性の高い語形成過程であるかもしれないが、果たして筆者の扱う Sandnes 方言（を含めたノルウェー語、さらにはノルド諸語）において複合語短縮が一般的な現象かは不明である。今後の調査が待たれる[*8]。

謝辞

本稿は、東京音韻論研究会 2013 年 1 月例会（2013 年 1 月 12 日, 東京大学駒場キャンパス）並びに北海道言語研究会 2015 年度第 2 回研究例会（2016 年 3 月 7 日, 室蘭工業大学）にて配布した資料[17][18]に加筆・修正を加えたものである。同研究発表において貴重なコメントを下さった聴衆諸氏にこの場をお借りしてお礼を申し上げる。また、本稿の草稿に有益なコメントを下さった査読者の方々もお礼を申し上げる。なお、本稿において引用した資料の一部は、日本学術振興会科学研究費助成事業による助成を受けて実施したフィールドワークにより採取したものであることを付記する（課題番号: 15K16729, 研究代表者: 三村竜之）。

文献

(1) 三村竜之, 「ノルウェー語 Sandnes（サンネス）方言のアルファベット頭文字語の音韻論」, 日本音韻論学会 2010 年度春期研究発表会（2010 年 6 月 18 日, 産学公連携センター・首都大学東京 秋葉原サテライトキャンパス）, 2010.
(2) 三村竜之, ノルウェー語 Sandnes（サンネス）方言の複合語アクセント規則, 明星大学研究紀要【人文学部・日本文化学科】, 第 19 号, 2011a, p. 216(63)-202(77).
(3) 三村竜之, ノルウェー語 Sandnes（サンネス）方言における音調のアクセント論的解釈, 室蘭工業大学紀要, 第 63 号, 2014, p. 77-91.
(4) 三村竜之, ノルウェー語 Sandnes（サンネス）方言における前気音の音韻論: 無声閉鎖音の解釈と関連づけて, 日本言語学会第 144 回大会予稿集, 2012, p. 162-167.
(5) Oftedal, Magne, “Jærske okklusivar”, *Norsk Tidsskrift for Sprogvidenskap*, 14, 1947, p. 229-235.
(6) Dommelen, Wim A. van, “Preaspiration in intervocalic /k/ vs. /g/ in Norwegian”, eds. John J. Ohala et al., *Proceedings of the 14th International Congress of Phonetic Sciences, San Francisco 1-7 August 1999*, Vol. 3, Berkeley: Linguistics Department, University of California, 1999, p. 2037-2040.
(7) Selmer, Ernst W., *Den musikalske aksent i Stavanger-målet*, Oslo:Det norske videnskaps-akademi i Oslo, 1927.
(8) Vanvik, Arne, “Norske tonelag”, *Maal og Minne*, 1956, p. 92-102. [eds. Ernst Håkon Jahr, Ove Lorenz, *Prosodi/Prosody* (Studier i norsk språkvitenskap 2), Oslo:Novus folag, 1983, p. 209-219. に再録]
(9) 城生佰太郎, 一般音声学講義, 東京:勉誠出版, 2008.
(10) 三村竜之, ノルウェー語 Sandnes（サンネス）方言におけるアルファベット頭文字語の音韻論, 音韻研究, 第 14 号, 東京:開拓社, 2011b, p. 19-26.

*8 ちなみに筆者が比較的精通しているデンマーク語では、複合語短縮（と考えらえる）事例として次のものが挙げられる: *bærbar*「ノート PC」(*bærbar computer*「ポータブル PC」), *fly*「飛行機」(< *flyvemaskine*), *mobil*「携帯電話」(< *mobiltelefon*); なお、以下のような判例も存在する: *bil*「自動車」(< *automobil*)。ちなみに、Sandnes 方言と系統的に極めて近しい言語であるアイスランド語においても「自動車」は同様に *bíll* であるが、デンマーク語や Sandnes 方言における *automobil* に相当する語は存在しない。

(11) 三村竜之, デンマーク語アルファベット関連語彙の音韻論, 東京大学言語学論集, 26, 2007, p. 1-20.
(12) 中井幸比古, 中央式アクセントにおけるアルファベット頭文字語のアクセント, 音声研究, 11, 2007, p. 69-86.
(13) 上野善道, 日本語方言のアルファベット関連語彙のアクセント, 東京大学言語学論集, 24, 2005, p. 171-196.
(14) 三村竜之, アルファベット複合語から見たデンマーク語複合語アクセントと意味制約, 日本言語学会第 136 回大会予稿集, 2008, p. 294-299.
(15) Duanmu, San, *A Formal Study of Syllable, Tone, Stress and Domain in Chinese Languages,* Doctoral dissertation: MIT, Cambridge MA, 1990.
(16) 窪薗晴夫, 語順と音韻構造: 事実と仮説, 音声文法研究会編『文法と音声 III』, 東京:くろしお出版, 2001, p. 107-140.
(17) 三村竜之, 「複合語アクセントと意味制約: ノルウェー語サンネス方言におけるアルファベット関連語彙を例に」, 東京音韻論研究会（Tokyo Circle of Phonologists; TCP）2013 年 1 月例会（2013 年 1 月 12 日, 東京大学駒場キャンパス）, 2013.
(18) 三村竜之, 「複合語の修飾構造とアクセント: ノルウェー語 Sandnes（サンネス）方言を例に」, 北海道言語研究会 2015 年度第 2 回研究例会（2016 年 3 月 7 日, 室蘭工業大学）, 2016.